

日本人大学生の国際交流に関する意識調査

—「内向き志向」と国際交流意思の関係—

小島奈々恵¹⁾, 内野 悌司¹⁾, 磯部 典子¹⁾, 高田 純¹⁾
二本松美里¹⁾, 岡本 百合¹⁾, 三宅 典恵¹⁾, 神人 蘭¹⁾
矢式 寿子¹⁾, 吉原 正治¹⁾

グローバル人材育成の一環として、日本人大学生の海外留学を促進させるべく多くの留学プログラムが高等教育機関では提供されている。しかし、国内での国際交流も、グローバル人材育成において重要な役割を担っている。本研究では、「内向き志向」と国際交流について検討した。国際交流における問題や利点について検討し、「内向き」と「外向き」な大学生を比較検討した。その結果、国際交流の意思と経験には差がなかった。しかし、「内向き」な大学生は、留学生との文化の違いや留学生とかわることにに対する不安が高く、その一方で、「外向き」な大学生は、国際感覚や就職に役立つ経験を、国際交流を通して得ることができると感じていた。国際交流を促す際、国際交流の良さや注意点について十分に情報提供し、特に「内向き」な大学生の不安を和らげることの重要性が示唆された。

キーワード：内向き志向, 日本人大学生, 国際交流

Inward-oriented Japanese students and international exchange

Nanae KOJIMA¹⁾, Teiji UCHINO¹⁾, Noriko ISOBE¹⁾, Jun TAKATA¹⁾
Misato NIHONMATSU¹⁾, Yuri OKAMOTO¹⁾, Yoshie MIYAKE¹⁾, Ran JINNIN¹⁾
Hisako YASHIKI¹⁾, Masaharu YOSHIHARA¹⁾

Higher education institutions are offering many study abroad programs for Japanese university students for them to build their global talents. However, international exchange programs with international students in Japan are also thought to play an important role in building Japanese students' global talents. In this study, the relationship between inward-oriented students and international exchange was discussed. The problems and merits of international exchange were examined, and inward-oriented students and outward-oriented students were compared. There were no differences in their willingness or in their experiences of international exchange. However, inward-oriented students felt more anxious about the difference in cultures and about having relationships with international students. On the other hand, outward-oriented students thought that they will be able to build their international sensibility through international exchange and that it will be an experience which will help them with their career. The importance of presenting the students with enough information about the good aspects and cautions of international exchange is emphasized especially to decrease the anxiousness of inward-oriented students.

Key words: inward-oriented, Japanese university students, international exchange

1) 広島大学保健管理センター

1) Health Service Center, Hiroshima University

著者連絡先：〒739-8514 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学保健管理センター

I. はじめに

グローバル人材育成において、高等教育機関は重要な役割を担っている。留学生の派遣と受入れに関わる様々なプログラムを提供し、修学から生活までの支援を大学教職員は担っている。2020年までに、日本人大学生の海外留学12万人を目指し(文部科学省, 2014)¹⁾、外国人留学生受入れ30万人を目指す(文部科学省他, 2008)²⁾。しかし、日本人留学生も外国人留学生も減少傾向にある(文部科学省集計, 2014; 日本学生支援機構, 2014)^{3,4)}。特に、日本人留学生の数は、2004年の82,945名をピークに、その後減少が進み、2011年には25,444名(30.7%)減の57,501名となった(文部科学省集計, 2014)³⁾。

小林(2011)⁵⁾や小島他(2014)⁶⁾によると、経済的問題、言語問題、日本人の「内向き志向」等が日本人の海外留学を阻害している。若者の「内向き志向」は、産学官によるグローバル人材の育成のための戦略(産学官によるグローバル人材育成推進会議, 2011)⁷⁾でも、問題視されており、マスコミ等にも取り上げられている。小島他(2014)⁶⁾では、「内向き」な大学生には留学意思がないことが示唆され、「外向き」な大学生に比べて、「内向き」な大学生は留学することに対して多くの問題を感じていることが示された。十分な情報提供や、不安に寄り添うことの重要性が指摘されているが、「内向き」な大学生の留学意思を育てることも重要である。国内での国際経験を通して、海外への興味や関心を育み、不安を和らげることで、留学意思も育まれると推測される。

また、産学官によるグローバル人材育成推進会議(2011)⁷⁾によると、グローバル人材とは、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」である。日本留学中の外国人留学生と交わす日常会話、講義でのディ

ベートや意見交換、部活やサークルでの交流、新渡日外国人留学生のサポート等、日本国内での国際交流が、グローバル人材育成過程の一端を担うことは可能である。

グローバル人材となる第一歩として、外の世界に対して興味や関心を抱くために、国内での国際交流は重要な役割を担う。したがって、本研究では、大学生の、国内での国際交流について検討する。大学生の「内向き志向」と留学意思について検討した小島他(2014)⁶⁾を参考に、国際交流を通して得られるもの、国際交流における問題、「内向き志向」と国際交流の関係について検討する。なお、「内向き志向」とは、若者の国際交流への興味や関心の低さ、国際交流することへの消極的な姿勢など、若者の思考や判断、態度、パーソナリティ等の傾向を幅広く捉えたものだと推察される。「内向き志向」とは、広義に解釈できる多義的な言葉であるが、本研究では、小島他(2014)⁶⁾に倣い、狭義に捉え、パーソナリティとしての「内向性」に着目する。また、「内向き」であることが国際交流することを阻害しているのであれば、「外向き」であることは国際交流することを促進すると考えられる。したがって、「内向性」および「外向性」と、国際交流意思との関係についても検討する。

II. 方法

1. 調査対象者

調査対象者は、教養講義に出席した大学生174名(男性99名, 女性75名)であった。欠損値のあった質問紙と、国籍が『その他(留学生)』『(回答なし)』であった質問紙を除外し、分析対象者は147名(男性81名, 女性66名; 平均年齢18.90歳, $SD = 1.10$)となった(有効回答率84.5%)。

2. 調査手続き

2014年度前期に実施された教養講義に出席していた大学生に質問紙を配布し、回収した。本調査で得られた情報を研究目的以外に用いることはなく、結果は全て統計的に処理されるために個人が特定されることはなく、調査に参加しなくとも(白

紙で提出しても) 不利益を被ることはないことを伝えた。なお、調査は無記名で実施した。

3. 調査内容

小島他 (2014)⁶⁾ の調査内容を参考に、質問紙を作成した。

外向性・内向性に関する項目 Big Five 尺度 (和田, 1996)⁸⁾ の外向性因子を構成する12項目について、「全くあてはまらない (1点)」から「非常にあてはまる (7点)」の7段階で評定させた。

国際交流に関する項目 国際交流経験の有無、国際交流意思の有無、国際交流に関する準備 (情報収集など)の有無について回答させた。さらに、国際交流に関する知識 (「大学の国際交流イベントについて知っている」と大学の国際交流に関する情報提供 (「大学は国際交流の情報を十分に提供していると思う」) については、「全くあてはまらない (1点)」から「非常にあてはまる (7点)」の7段階で評定させた。

国際交流における問題に関する項目 「自身の日常的な外国語力が不足している」「留学生の日本語力が不足している」「交際費がかかる」などの国際交流における問題16項目について、「全く問題にならないと思う (1点)」から「非常に問題になると思う (7点)」の7段階で評定させた。

国際交流を通して得られるものに関する項目 「語学力」「異文化感性」「国際感覚」などの国際交流を通して得られるもの9項目について、「全く得ることができないと思う (1点)」から「非常に得ることができると思う (7点)」の7段階で評定させた。

人口統計学的要因 性別、年齢、国籍について回答を求めた。

なお、質問紙には他の項目も含まれていたが、今回の分析には用いなかったため、詳細は省略した。

4. 統計解析

SPSS を用いて分析を行った。各変数 (項目) の基礎統計を算出し、外向性因子を用いて外向群と内向群を抽出した。外向群と内向群の差につい

て検討するため、各項目の χ^2 検定および t 検定を行った。

Ⅲ. 結果

1. 分析対象者の特徴

在籍する大学に所属している留学生と交流経験のある大学生は69名 (46.9%) であった。また、留学生と国際交流したいと考えている大学生が117名 (79.6%) であった。しかし、留学生と交流するための準備 (情報収集等) をしている大学生は8名 (5.4%) であった (不明11.6%)。

国際交流に関する知識と大学の国際交流に関する情報提供について7段階で評定させたが、「非常にあてはまる」「わりとあてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」を「知っている/提供している」、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらかといえば、あてはまらない」を「知らない/提供していない」とし、回答を整理した。その結果、「大学の国際交流イベントについて知っている」大学生は22名 (15.0%; 知らない103名 (70.1%), どちらともいえない22名 (15.0%)) であり、「大学は国際交流の情報を十分に提供していると思う」大学生は31名 (21.1%; 提供していない52名 (35.4%), どちらともいえない64名 (43.5%)) であった。

国際交流したいと考える大学生は多いが、自ら情報収集等の準備をする大学生は少ないことが示唆された。また、大学が国際交流に関する情報提供を行っていると感じている大学生は少なく、大学の国際交流イベントについて知っている大学生も少なかった。

2. 外向群/内向群の分類

小島他 (2014)⁶⁾ に倣い、分析対象者を外向群と内向群に分類した。外向性因子を構成する12項目の信頼性係数は.91であったため、12項目の平均値を算出し、外向群と内向群を抽出して検討した。具体的には、平均値 +1SD より12項目の平均値が高かったものを外向群とし、平均値 -1SD より12項目の平均値が低かったものを内向群とした (全員: $M = 4.40$, $SD = 1.01$)。その結果、外向群

は22名（男性12名，女性10名； $M = 5.88$, $SD = .37$ ），内向群は17名（男性12名，女性5名； $M = 2.53$, $SD = .74$ ）であった。

3. 外向群 / 内向群と国際交流

分析対象者の約8割（79.6%）が在籍する大学で国際交流したいと思っていた。国際交流意思について，外向群と内向群についても詳しく検討した結果，外向群もしくは内向群であった39名のうち，26名に国際交流意思があり，13名にはなかった。外向群 / 内向群と国際交流意思に関する関連性について検討するため， χ^2 検定を行ったところ差はなかった（ $\chi^2 = 2.55$, $df = 1$, $p = .11$ ；表1）。

また，分析対象者の約半数（46.9%）に在籍する大学で国際交流の経験があった。国際交流経験について，外向群と内向群について詳しく検討した結果，外向群もしくは内向群であった39名のうち，18名に大学での国際交流経験があり，21名にはなかった。外向群 / 内向群と国際交流経験に関する関連性について有意な差はなかった（ $\chi^2 = .56$, $df = 1$, $p = .45$ ；表2）。

すなわち，国際交流の意思と経験において，外

表1 外向群 / 内向群と国際交流意思

	国際交流意思	
	有	無
外向群	17	5
内向群	9	8

表2 外向群 / 内向群と国際交流経験

	国際交流経験	
	有	無
外向群	9	13
内向群	9	8

向群と内向群の間に差が認められなかった。

4. 国際交流における問題

国際交流における問題に関する各項目の得点を表3に示した。得点が高いほど，各要因に問題があると大学生が感じていることを意味した。日常的な外国語力の不足，学術専門的な外国語力の不足，交流する時間のなさに，大学生が特に問題を感じていることが示唆された。

外向群と内向群の間に差があるか検討するため，対応のない t 検定を行った。その結果，「留

表3 国際交流における問題

	全員		外向群		内向群		差の検定	
	M	SD	M	SD	M	SD	t 値	df
自身の日常的な外国語力が不足している	5.31	1.50	5.45	1.53	6.12	0.78	-1.75 †	33
自身の学術専門的な外国語力が不足している	4.90	1.77	5.23	1.80	5.06	1.85	0.29	37
留学生の日本語力が不足している	3.54	1.37	3.09	1.23	3.53	1.77	-0.91	37
留学生の英語力が不足している	3.65	1.52	3.86	1.67	3.71	1.93	0.27	37
交際費がかかる	4.00	1.69	4.18	1.68	4.29	1.69	-0.21	37
交流する場所の確保が難しい	4.07	1.63	4.36	1.65	4.53	1.97	-0.29	37
留学生との交流イベントを探すのが難しい	4.20	1.51	4.23	1.77	4.59	1.50	-0.67	37
留学生との交流イベントへの申込手続きが煩雑である	4.14	1.47	4.32	1.70	4.47	1.33	-0.30	37
留学生の教育レベルが高い	3.73	1.56	3.64	1.53	4.00	1.87	-0.67	37
留学生の教育レベルが低い	3.14	1.33	3.82	1.50	3.53	1.55	0.59	37
留学生と交流する時間がない	4.78	1.46	4.64	1.33	5.82	1.07	-3.00 **	37
留学生と交流するための準備が大変である	4.26	1.53	4.32	1.29	4.88	1.80	-1.14	37
留学生との交流に関する情報が不足している	4.33	1.51	4.18	1.56	4.71	1.83	-0.96	37
留学生に関する情報が不足している	4.41	1.50	4.27	1.61	4.88	1.54	-1.20	37
留学生との文化の違いに不安がある	4.01	1.66	3.68	1.55	5.00	1.70	-2.52 *	37
留学生とかかわることに不安がある	3.95	1.70	3.68	1.59	4.82	1.91	-2.04 *	37

注1) 差の検定結果は，外向群と内向群の差の検定結果である。

注2) ** $p > .01$, * $p > .05$, † $p < .10$

学生と交流する時間がない」「留学生との文化の違いに不安がある」「留学生とかかわることに不安がある」の3項目に有意な差がみられ、「自身の日常的な外国語力が不足している」の1項目に傾向差がみられた。どの項目においても、外向群の得点に比べて、内向群の得点のほうが高かった。

5. 国際交流を通して得られるもの

国際交流を通して得られるものに関する各項目の得点を表4に示した。得点が高いほど、国際交流を通して得られると大学生が考えていることを意味した。全9項目の得点は、中央値の4.00以上(得点は1.00-7.00の間)であり、異文化との触れ合い、異文化感性、国際感覚などを、特に得ることができるかと大学生が考えていることが示唆された。

外向群と内向群の間に差があるか検討するため、対応のないt検定を行った。その結果、「国際感覚」「就職活動に役立つ経験」の2項目に有意な差がみられ、「専門知識」「国際的ネットワーク」「異文化との触れ合い」の3項目に傾向差がみられた。どの項目においても、内向群の得点に比べて、外向群の得点のほうが高かった。

IV. 考察

1. 大学生の国際交流

在籍する大学内での国際交流を望む大学生は79.6%と多く、分析対象者の46.9%には実際に国

際交流の経験があった。しかし、大学が提供する国際交流に関する情報について知っている大学生は15.0%であり、自ら情報収集等の準備を行っていた大学生は5.4%のみであった。実際に国際交流経験のあった学生46.9%(69名)について再検討した結果、その59.4%(41名)が理系学部に所属する学生であった。調査を実施した大学に所属する学部留学生は少ないが(2014年5月現在で6.2%)、そのほとんどは理系学部に所属していた(学部留学生の77.3%)。そのため、実際に国際交流のあった学生は、積極的に国際交流する機会を求めなくとも、授業等を通して留学生と交流する機会があったと考えられる。そして、国際交流に関する情報を得ている学生が少ないことから、これらの学生は受動的に留学生と接していることが推測される。

国際交流したいと思いつつ、実際に国際交流するための準備(情報収集等)を積極的にしている大学生は少ないことが示唆された。類似した結果が、小島他(2014)⁶⁾でも得られており、留学意思のある大学生は66.0%(分析対象者418名のうち276名)と多かったが、実際に留学するための準備(情報収集等)をしている大学生は16.7%(分析対象者418名のうち70名)であった。語学力や時間のなさ(表3)が国際交流することを難しくしているであろうことは否定できないが、大学生が国際交流することに対して積極的であるとも言えない。

表4 国際交流を通して得られるもの

	全員		外向群		内向群		差の検定	
	M	SD	M	SD	M	SD	t 値	df
語学力	5.15	1.41	5.73	1.03	5.29	0.99	1.33	37
異文化感性	5.82	1.02	6.18	0.96	5.71	0.99	1.52	37
国際感覚	5.65	1.10	6.27	0.88	5.35	1.00	3.05 **	37
専門知識	4.21	1.46	4.82	1.56	3.88	1.45	1.91 †	37
国際的ネットワーク	4.90	1.28	5.50	1.34	4.71	1.21	1.91 †	37
就職活動に役立つ経験	4.82	1.33	5.64	1.18	4.76	1.35	2.15 *	37
異文化との触れ合い	5.93	0.85	6.32	0.84	5.82	0.64	2.02 †	37
自己の内的成長	5.43	1.16	5.64	1.53	5.35	1.00	0.66	37
日本人アイデンティティ	5.16	1.29	5.59	1.47	5.47	0.80	0.30	37

注1) 差の検定結果は、外向群と内向群の差の検定結果である。

注2) **p > .01, *p > .05, †p < .10

国際交流に関する情報を大学が十分に提供していると回答した大学生は21.1%であったが、提供していないと回答した大学生は35.4%であり、どちらともいえないと回答した大学生は43.5%であった。国際交流に関して、自ら情報収集等している大学生が少ないために、大学が情報提供しているか否かの判断が難しかったのだと推測できる。しかし、大学が情報提供していないと回答した大学生は少なくなく、無視できない数字である。大学としても、より積極的に国際交流の場を設け、情報提供していく重要性が示唆された。

しかし、大学生の積極性のなさを考えると、例えば、大学のホームページに情報を掲載するだけでは、国際交流イベントへの参加を促進させるのは難しいかもしれない。大学生が考える国際交流における問題を改善し、参加が容易になるような国際交流イベントが必要となる。

2. 国際交流における問題

自身の外国語力が不足しており、時間がなく、留学生や留学生との交流に関する情報が不足していること(表3)が、大学生が国際交流する際の問題になっていることが示された。手続きの煩雑さや交際費、留学生との文化差や留学生とかかわることへの不安、留学生の言語レベルや教育レベルの得点も、中央値の4.00前後(得点は1.00-7.00の間)であり(表3)、国際交流における問題になっていないとは言い難い。

語学力や経済的問題、不安などが、留学を阻害していることが示唆されている(小島他, 2014)⁶⁾。しかし、国内での国際交流においても、語学力などは問題になることが示され、留学特有の、国際交流特有の問題というより、日本人大学生が外国人とかかわるときの一般的な問題として捉えることができる。その際、語学力に関する支援を前提に、小島他(2014)⁶⁾も指摘しているように、適切な情報を十分に提供し、交流することの不安を和らげることが重要となる。留学生や留学生との交流に関する情報は、必ずしも、国際交流イベントの案内等を意味しない。留学生の特徴(年齢や出身国)、文化や生活、話すときの注意点なども、

留学生や留学生との交流に関する情報である。このような情報を提供すると同時に、日本人大学生が安心して参加できるように、支援者も参加(同席)する国際交流の場を提供することで、国際交流は促進されるかもしれない。国際交流に適した環境を整えていくことが今後の課題となる。

3. 国際交流を通して得られるもの

大学生にとって、国際交流は問題ばかりではない。異文化との触れ合い、異文化感性や国際感覚、自己の内的成長や日本人アイデンティティの得点は、中央値の4.00以上(得点は1.00-7.00の間)であり(表4)、これらについて、大学生は国際交流を通して得られると考えていた。同様に、留学を通して、異文化との触れ合い、異文化感性や国際感覚、自己の内的成長や日本人アイデンティティは得られると考えられていた(小島他, 2014)⁶⁾。国際交流を通して、留学を通して、異文化との触れ合い、異文化感性や国際感覚が育まれることを大学生が期待していることが窺われた。

国際交流を通して、異文化と触れ合い、異文化感性や国際感覚を育むだけではなく、外国人とかかわる際の情報(知識や経験)を獲得することで不安も和らぐことが期待される。留学準備の一環として国際交流する場を提供することで、不安をも和らげる支援が可能となる。

4. 外向群と内向群の比較

国際交流の意思および経験において、外向群と内向群との間に差はなかった。小島他(2014)⁶⁾によると、留学に関しては、内向群に比べて、外向群は留学意思があり、留学準備もしていた。国際交流に関して同様の結果は得られず、留学に比べて、国際交流には抵抗が低いことが推測される。つまり、国外への留学は難しくとも、国内での国際交流には否定的でないことが窺われた。国際交流とは言え、母国での国際交流のため、ハードルが低く、安心感も高いのかもしれない。安心して参加できる母国での国際交流イベント等への参加を通して、留学生すなわち外国人との経験を

積み、留学生（外国人）とかかわることの不安を和らげることは、海外への留学を促進する経験となることが期待される。

また、国際交流における問題として、「留学生と交流する時間がない」「留学生との文化の違いに不安がある」「留学生とかかわることに不安がある」に、外向群と内向群の間に有意差が示された。どの項目においても、外向群に比べて、内向群の得点が高かった。時間のなさについては、その理由について回答を求めていなかったために、理由は定かではない。しかし、不安については、小島他（2014）⁶⁾と同様の結果が得られている。留学においても、「海外での生活に不安がある」「海外での対人関係に不安がある」に外向群と内向群の間に有意差が示され、外向群に比べて、内向群の得点が高かった。すなわち、「内向き」な大学生は不安が高いことが示唆された。国際交流においても、留学においても、外向群と内向群の不安の間に差があり、実際に国際交流もしくは留学することに対して不安が影響していることが推測された。

国際交流を通して得られることとして、「国際感覚」「就職活動に役立つ経験」に、外向群と内向群の間に有意差が示され、内向群に比べて、外向群の得点が高かった。小島他（2014）⁶⁾では、留学が「就職活動に役立つ経験」となることについて、内向群に比べて、外向群の得点が高い傾向にあった。国際交流においても、留学においても、就職活動に役立つ経験となると外向群は高く評価していた。

V. まとめ

国際交流することを望んでいた大学生は多く、実際に国際交流している大学生も多かった。しかし、積極的に国際交流するための準備をしている大学生は少ないことが窺われた。語学力の不足、時間のなさ、留学生や留學生との交流に関する情報の不足が、国際交流する際の問題として捉えられており、大学生が国際交流することを阻害していると推測された。その一方で、国際交流することを通して、異文化との触れ合い、異文化感性や

国際感覚、自己の内的成長や日本人アイデンティティを得ることができると大学生は考えていることが窺われた。外向群と内向群を比較した結果、国際交流には、不安が阻害要因として働き、就職活動に役立つことが促進要因として働くことが示唆された。なお、類似した結果が留学意思について検討した小島他（2014）⁶⁾でも得られている。

しかし、小島他（2014）⁶⁾では、外向群に比べて、内向群に留学意思がないことが明らかとなった。本研究では、国際交流の意思や経験について、外向群と内向群の間に差が認められなかった。すなわち、「内向き（内向群）」な大学生にとって、留学に比べると国内での国際交流は参加しやすいものと考えられる。国内での国際交流を通して、留学生（外国人）とかかわる経験を積み、不安を和らげることが、「内向き」な大学生の留学を支援するひとつの方法として提案される。不安に寄り添い、大学生の不安を軽減できるように支援を提供することが重要であると考えられた。

文 献

- 1) 文部科学省：トビタテ！留学 JAPAN <http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/tobitate/index.htm>, 2014.6.
- 2) 文部科学省, 外務省, 法務省, 他：「留学生 30万人計画」骨子 <<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>>, 2008.7.29.
- 3) 文部科学省集計：日本人の海外留学状況 <http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2014/04/07/1345878_01.pdf>, 2014.3.
- 4) 日本学生支援機構：平成25年度外国人留學生在籍状況調査結果 <http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13.pdf>, 2014.3.
- 5) 小林 明：日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策. ウェブマガジン『留学交流』 <<http://www.jasso.go.jp/about/documents/akirakobayashi.pdf>>, 2011年5月号.
- 6) 小島奈々恵他：日本人大学生の海外留学に関

- する意識調査—「内向き志向」と留学意思の関係—。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集, 30：21-26, 2014.
- 7) 産学連携によるグローバル人材育成推進会議：産学官によるグローバル人材育成のための戦略 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf>, 2011.4.28.
- 8) 和田さゆり：性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成。心理学研究, 67：61-67, 1996.